

第27号 通巻第6巻第1号

1986年6月1日発行

守山市立埋蔵文化財センター

TEL 0775-85-4397

〒524-02

守山市服部町2250番地

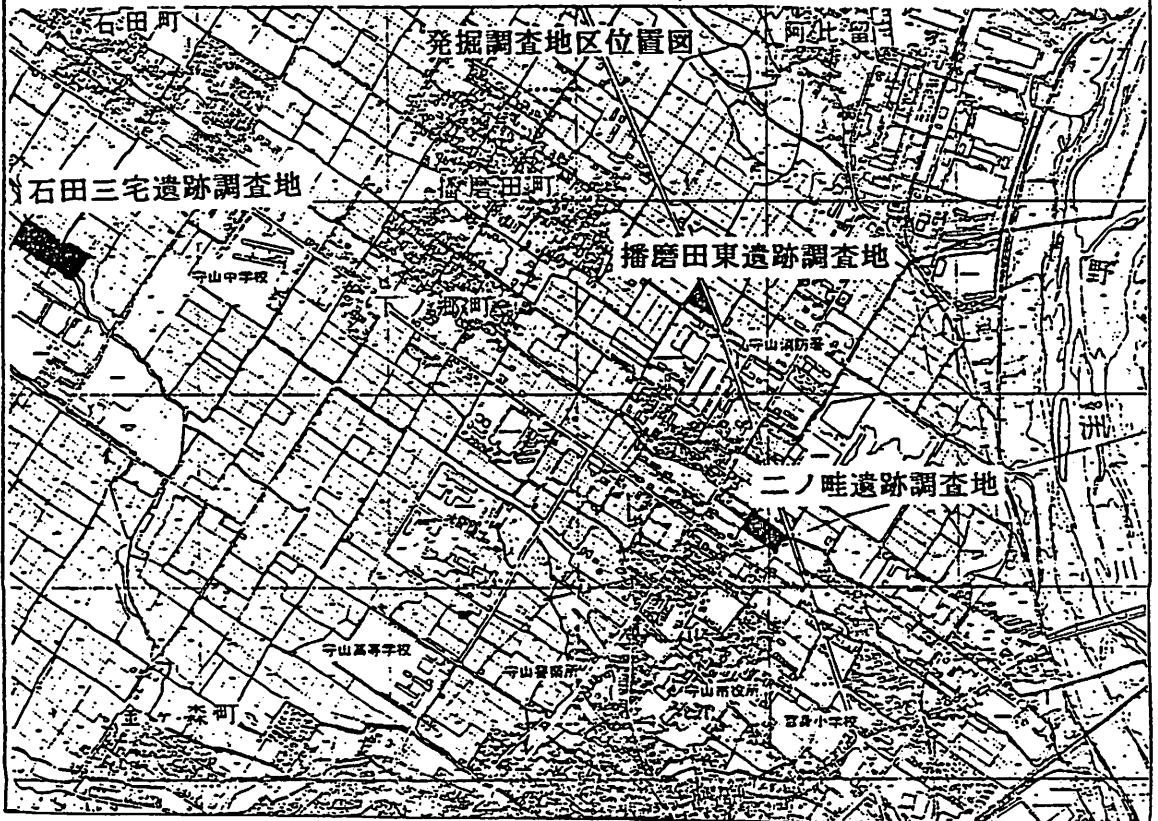
はじめに

6月、また梅雨の時節になり、ぐずついた天気は気分までもうっとうしくさせます。けれどちょっと気分を変えて散歩気分て雨の日外へ出てみると、紫陽花の花が色鮮やかに咲き、木立の緑はみずみずしく、案外と気分も晴れて、うっとうしい雨も「恵の雨」と感じられるかもしれません。

しかしこの時期、発掘調査をしている私達は毎日の天気予報を気にしながら調査をしているのが現実です。

発掘調査だより

守山市では4月から3ヶ所で発掘調査を行っています。以下、各担当からの報告をお伝えします。



播磨田東遺跡の発掘調査

4月5日に開始しました播磨田東遺跡の現地発掘調査は5月17日に終了いたしましたので、調査の概要を報告致します。

調査地は播磨田町字酒手に所在するもので、位置図のとおり、県道栗東一大津線（琵琶湖大橋取付道路）の南側に隣接する水田地であり、調査の作業風景を御覧になった方も多いかと思います。

さて、当地に分布する播磨田東遺跡は弥生時代中期～古墳時代にかけての集落跡として周知されている遺跡であり、又縄文時代後期の土器も出土しています。当遺跡は過去2件の発掘調査が実施されていますが、それは当地北東方に現在営まれている河西ニュータウン造成時の調査（昭和54年）と同ニュータウンの東方周辺地で昭和58年に実施された調査で、その成果より播磨田東遺跡の実態の一端を掴むことができました。54年の調査では、弥生時代中期の円形竪穴住居4棟、後期から古墳時代中期にかけての方形竪穴住居55棟の他井戸跡などの集落遺構とそれに伴う種々の遺物を検出しております。さらに特記すべき成果として、古墳時代の玉生産を窺えた事で、竪穴住居の1棟に滑石を用材とした有孔円板、剣型模造品、刀子型模造品、勾玉、管玉などの製品、未製品、原石そして製作時に用いられたと容易に想像できる玉砥石（研磨し整形するための砥石）が出土したのです。この調査により、播磨田町の地に包蔵される古代の大集落として広く周知される様になったのです。次に58年度の調査では竪穴住居の他、弥生時代中期から古墳時代の時期の方・円形周溝墓、古墳跡が検出されています。

この様な播磨田東遺跡の3件目の調査になるわけですが、平面図のとおり、大小10基の土壇（SX-1～8、10、11）、井戸跡（SE-1）、方形周溝墓（SX-9）そして溝（SD-1）を検出しました。

まず土壇ですが、SX-2、3の底には焼土がみられ、さらにSX-2については柱穴痕とも考える事のできるピットがあり、ともに円形の竪穴住居の可能性がります。SX-6は調査地中央より検出したもので、ここからは、おそらく勾玉の未製品と考えられる加工石が出土しています。材質は流紋岩で鮮やかな緑色に発色しており、北陸で産し、遠路ここに搬入されたものと考えられます。青く（緑）色美しい玉（勾玉、管玉）を得るため、その材を北陸にまで求めた事は驚くべき事であると同時に、広い交流範囲の存在を物語るものです。これらの土壇は弥生時代中～後期の時期が考えられます。

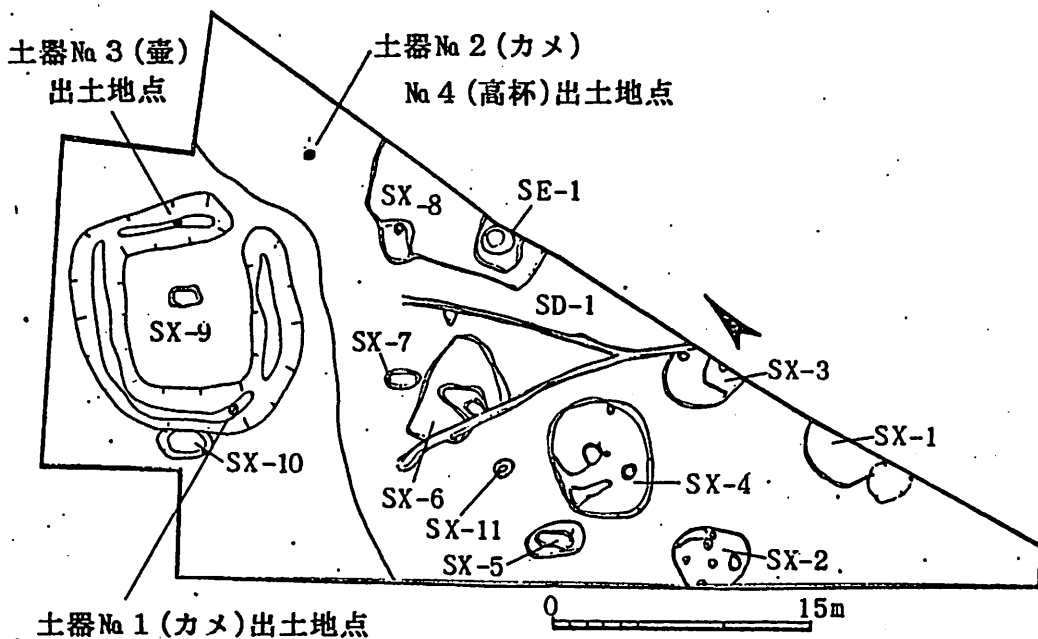
次に井戸跡SE-1は径約2mの円形状に、検出面より約2.5mの深さに掘りこまれ、取水したものです。井戸底ちかくからは土留めのため周壁に打ち込

まれた杭も残っています。弥生時代中期の所産と考えられます。

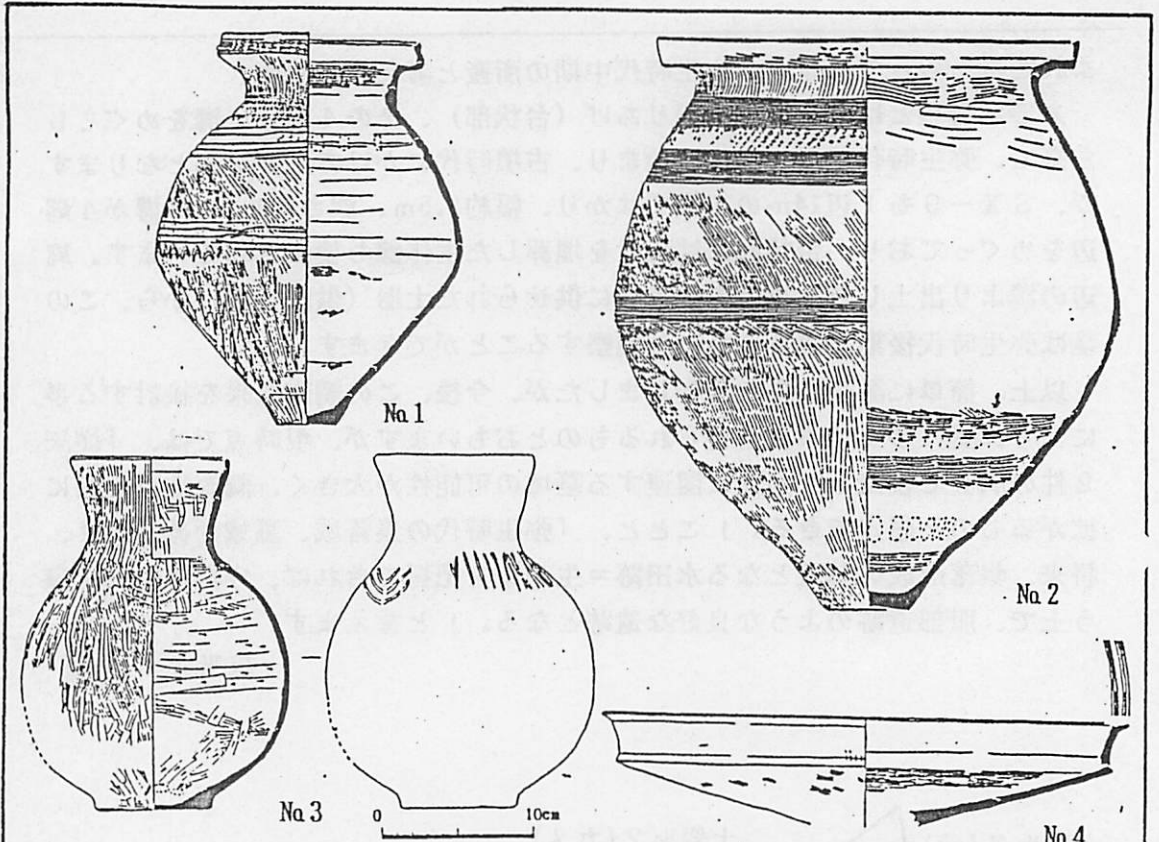
方形周溝墓とは土を方形に盛りあげ（台状部）、その4周辺に溝をめぐらした墓で、弥生時代前期に畿内に始まり、古墳時代にかけて主要な墓となりますが、SX-9も1辺14mの規模をはかり、幅約2.5m、深さ約1.2mの溝が4周辺をめぐっており、台状部には死者を埋葬した主体部も検出されています。周辺の溝より出土した、死者を葬る際に供せられた土器（供献土器）から、この墓は弥生時代後期に築造されたと推察することができます。

以上、簡単に調査成果を報告しましたが、今後、この調査成果を検討する事により、更に多くの事実を得られるものとおもいますが、現時点では、「従来2件の調査で検出した集落に関連する墓域の可能性が大きく、調査地以北西に広がるものと想定できる。」ことと、「弥生時代の集落域、墓域が確認でき、将来、集落形成の基盤となる水田跡＝生産域を把握できれば、守山の古代を窺う上で、服部遺跡のような良好な遺跡となる。」と言えます。

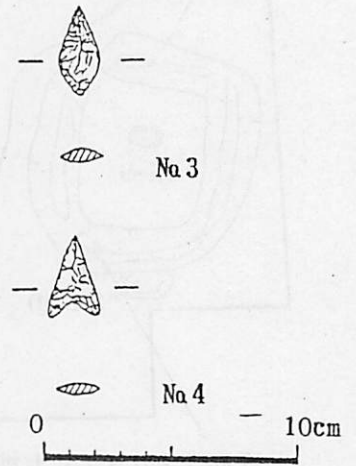
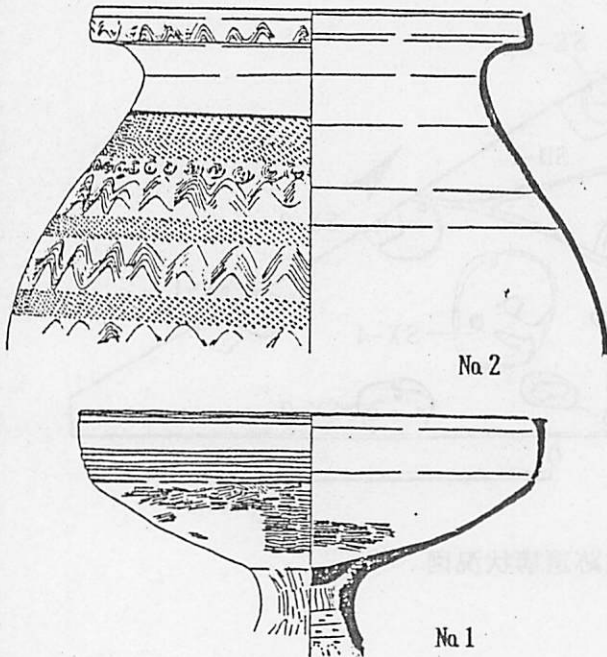
担当者 岩崎



播磨田東遺跡遺構状況図

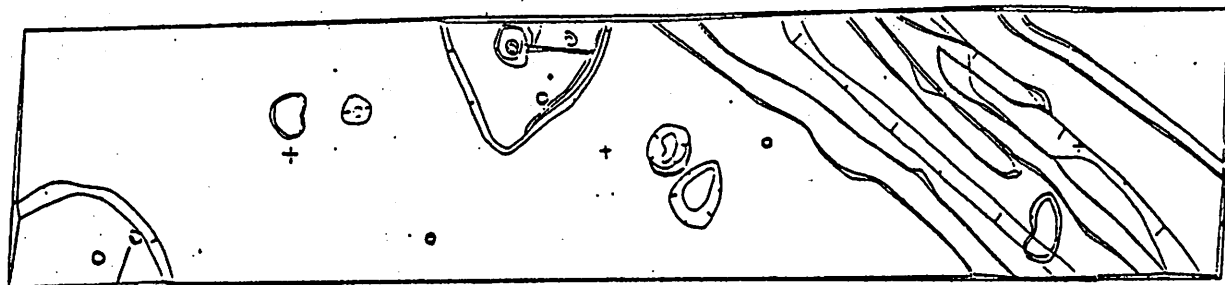


播磨田東遺跡出土 土器実測図

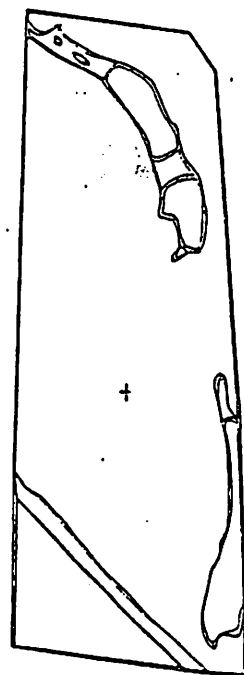


二ノ畦遺跡出土
土器、石器実測図

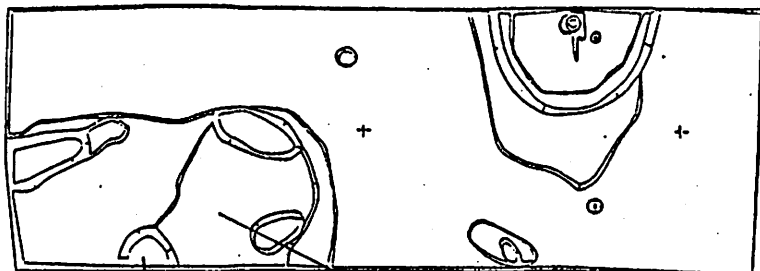
二ノ畦遺跡 遺構図



土器No 2 (壺) 出土地点

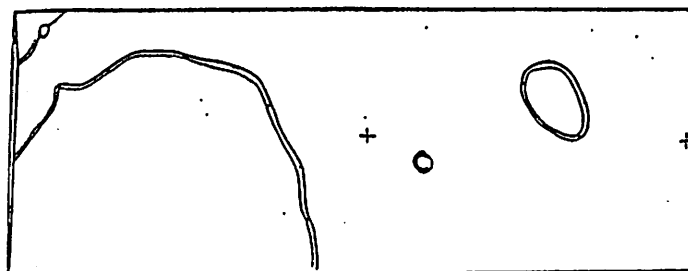


5



土器No 1 (高杯) 出土地点

石器No 3 (石ぞく) 出土地点



0 5 10m

二ノ畦遺跡の発掘調査

5月中旬から始まった二ノ畦遺跡の調査の近況をお伝えします。同遺跡は野洲町と守山市にまたがり、弥生時代から古墳時代後期にわたって営まれた集落遺跡です。野洲町において、弥生時代中期末の2条の環濠状遺構が検出された地点に今回の調査区は近接しており、環濠集落の内部を現在調査中であると考えられます。現在、弥生時代中期の終わり頃の竪穴住居3棟を始め、土竈・焼土竈などが検出されており、弥生式土器や石器類が出土しています。竪穴住居などから出土している土器は、凹線文が発達しており、野洲町側で検出された環濠状遺構の年代とほぼ同時代の特徴を示しています。野洲川左岸の同時代の集落では、二ノ畦遺跡を始め播磨田東遺跡、下之郷遺跡など環濠をめぐらせた遺跡が近接して営まれています。この時期には石製武器の発達や湖東・湖西岸での高地性集落の出現などが継起的に確認されており、社会的緊張の高まった時代であったと思われます。今後調査は集落の外にむかって進みますが、当時の人々の生活が少しずつわかってくると思います。 担当者 伴野

石田三宅遺跡の発掘調査

石田三宅遺跡は守山市石田町の南西一帯にひろがる水田地に所在している集落遺跡です。県住宅供給公社の宅地造成工事に伴う事前調査として、4月から県教育委員会（滋賀県文化財保護協会）と守山市教育委員会の間で、調査が進められています。

現在までの調査では旧河道と磨製石斧が出土した弥生時代中期の溝1条を検出しています。旧河道からは底近くの砂の中から弥生時代中期～古墳時代後期までの多量の土器にまじって一部縄文時代晩期の土器が出土しています。又、河道の底からは獣の骨や歯も出土しています。

石田三宅遺跡の発掘調査は9月末頃まで予定されており、その成果は順次この紙面をかりて報告したいと思います。 担当者 宮下

後記

春期特別展を去る4月29日～5月11日まで「守山の中世社会」というテーマで開催しましたところ多数の見学者があり、大変励みに感じております。次回の特別展は8月に予定しております。詳細は次号の「乙 貞」、広報等でお知らせいたします。